特別研修

月例研究会　議事録（　10　月）

2010 年度第　5　回

報告題名　集団の世代継承の実証分析に対するナラティヴ・アプローチの適用に関する試論 —世代間をつなぐ「共感」の役割に着目して—	
報告者　小山田 晋	**日時** 10 月 14 日　午後 3 時～
（所属分野）　環境経済学分野	**場所**　第 7 講義室
座長　福田	**議事録担当者**　中村

出席者

長谷部、木谷、安江、両角、米倉、冬木、伊藤、石井、小山田、菅井、水澤、佐藤、韓、大友、スチン、八木、宮本、神浦、佐々木（龍）、福田、宮里、渡邊、山口、林、王、北村、堀、滝田、威、易、中村、泉井、金、覃、小原、片山、佐々木（彩）、佐藤（良）、澤田、渋谷、千葉、藤

報告要旨

地域集落、NPO、営利組織といった様々な集団において世代継承がうまく行われないとき、その集団は統一性のある集団として持続することが難しくなる。本報告では、「世代継承」を、集団の慣習・価値観・方針といった「規範」が現世代と次世代の間で共有されることとして捉えている。規範が現世代と次世代で共有されない場合、世代間で対立が起きたり、世代同士が互いに関心を持つことができず、結果的に集団が分裂してしまう。

集団を持続させるための方策を明らかにすることができるという点で、世代継承に関する実証研究には意義があると考えられる。しかし、実証の際に「規範」を集団にとって本質的で変化しないものとみなすことで、集団の変質を捉えられなくなる危険がある。たとえば、地域住民による自然保護活動は、外部の自然保護団体が加わることで新たな展開を見せることがあるが、集団の規範が変化することを前提とした実証方法がなければこうした現象は解釈できない。

そこで本報告では、集団の世代継承を捉えるために、ナラティヴ・アプローチによる実証方法の概要を設計することを目的とする。ナラティヴとは物語り（narrative）のことである。集団の成員は他の成員と集団の出来事を物語り合うことで、集団の規範を共有したり、物語るという行為の中で新たな物語りを生み出す。ナラティヴ・アプローチは、①規範の共有を物語られた物語り文の共有によって客観的に示すことができる、②互いに物語る・聴くという相互行為によって物語りが変化していくプロセスをたどることで、規範の変質を扱うことができる、という2点において、世代継承の実証分析手法として極めて有効であると考えられる。

ところが、「物語りの共有・非共有」という視点だけでは、物語りを共有しつつある中間段階を捉えられない。「物語の共有・非共有」という視点から集団の成員を二分することで、現世代が共有する物語りを唯一の正統な物語とみなしてしまい、物語りが変化するプロセスを見過ごす可能性がある。そこで、物語りを共有しつつある中間段階にある主体として、「物語りに共感する主体」を想定する。世代間で物語りを共有するとき、障害になるのは、現世代がかつて体験した出来事を次世代は体験していないという点である。ともに体験していない出来事については、次世代は現世代の物語りを「あたかも自分が体験したかのように（物語りに共感して）」聴くことが必要になる。次世代が集団の物語りに対して、［非共有］→［共感］→［共有］の三つの段階をたどると仮定することで、現世代と次世代が互いに物語り合うことで集団の物語りが変化していくプロセスを捉えることが可能になると考えられる。

報告内では、自然保護活動に関する対照的な２つの事例について、ナラティヴ・アプローチによる簡易的な分析を行なう。分析では、集団が持続しない要因として、現世代と次世代が共通の体験を持っていないこと等を示し、集団が変質しつつも持続する要因として、現世代の物語りに共感するための体験や場を次世代が持っていること等を示す。

質疑・応答

冬木：テーマは集団の世代継承となっているが、松川浦の例は団体や組織の継承の話となっており、白神の例は保全活動という行為の継承の話となっている。これらは分類して、テーマを絞っていくべきではないか？

小山田：ご指摘の通り、テーマは絞っていきたいと思う。白神の例は活動によそ者が関わったことで意識が変わっていったという例であり、対象を集団に限定せずに活動も含めて考えていきたい。

両角：松川浦の事例において、高齢化が進んでいる保護団体に対応して周辺住民が挙げられているが、この周辺住民はどのような位置づけなのか？世代を継承する次世代の人々なのか？

小山田：次世代の人々というのは（集団の）外部から新しく加わってくる人というように考えており、今後周辺住民が保護団体に共感して次世代として加わってくることを想定している。

木谷：先ほどの説明ではただ単に構造化された情報を共有するという次元に留まっているが、ナラティブアプローチにおいては「物語り」ではなく「物語る」というその人の価値観をも含む行為自体に注目するべきではないか？

小山田：現世代と次世代が物語り合うことで新しい物語りが生まれるということに注目している。

木谷：新しい物語りが生まれるのは結果であり、目的ではない。情報のやりとりという点に注目するのではナラティブアプローチとは言えないのではないか？

両角：物語ることで共感を形成するという点において単なる情報のやりとりとはなっていないと感じる。共有とは違い、共感には価値が含まれており、継承する過程においてその共感を自分のものとしていくということに意味があると思う。

米倉：（まったくのよそ者である）私にとっては白神や松川浦の事例に共感できる点はまったくなかった。第三者でも共感できるような話でなければ共感は生まれないのではないか？もう一点、世代継承する物語りと言うならば、究極的には神話ということになる。ナラティブアプローチを詰めるつもりならば、神話を対象にするのが一番良いのではないか？

小山田：検討してみます。

大友：共感するということは、聞く側が主体性を持つという意味を持つのか？

小山田：はい、他人事として聞くのではなく、主体性を持って聞くことに意味がある。

大友：話す側の問題ではなく、聞く側の問題ということなのか？

小山田：聞く側の問題として捉えている。